# ブルーナーの教育論に関する一考察(4)
## ― 大学時代を中心に―

今井　康晴 [1)]
(2015 年 1 月 5 日受理)

# Study of Bruner's Educational Theory (4): College student days

Yasuharu IMAI[1)]

This study uses Jerome Bruner's autobiography to examine the formative process of his education theory. In this paper, I focus on his life at Duke University, his time at Harvard University, and his involvement in World War II, and I analyze this period with respect to his political influences and his academic activities in psychology and pedagogy. I also consider Bruner's personal relationships and involvement with other educators.

**Key words:** Bruner, Autobiography, college life, Duke University, Harvard University

**キーワード**：ブルーナー、自伝、大学生活、デューク大学、ハーヴァード大学

## はじめに

本研究は、ブルーナー（Jerome Bruner　1915-）の教育論の形成過程を、彼の自伝的著作『心を探して　ブルーナー自伝』(*In Search of Mind Essays in Autobiography*）を主な資料として考察した。拙稿「ブルーナーの教育論に関する一考察 (3)―教育論の形成過程を中心に―[1]」では、幼少期から高校卒業までを中心に明らかにした。ブルーナーは、裕福な家庭に生まれ、4 人兄弟の末っ子として、特段の軋轢もなく、むしろかわいがられて育ってきた。しかし、2 歳まで盲目であり、その後の 2 度の手術によって視力を得た。そのため諸世界への認識、知識に対する興味、「知ること」についての好奇心が人よりも強く、そのことが研究者へと導いたことを述べている。

ブルーナーの研究スタイルを検討すると、様々な領域を網羅し、「最新のもの」ということが特徴として挙げられるが、それは盲目から光を得たことと密接に関わり合っている。また彼自身、認知、思考、言語という各研究が、バラバラではなく、文化という概念で統合されていることということを強調するが、このことは、父親の愛読書『エンサイクロペディア・ブリタニカ』でものを調べることが楽しみであった幼少期の体験とも関係している。このように幼少期における生い立ちや後の心理学、教育学の研究の礎となっていることが明らかにされた。

こうした幼少期をふまえ、本稿では引き続き、デューク大学での生活、ハーヴァード大学での研究活動などを中心に明らかにする。

## １．デューク大学時代のブルーナー

### (1) 学生生活

1933 年、ブルーナーはデューク大学に入学が決まり、ノース・カロライナ、ダラムに移住した。そこで彼は、大学生らしい大学生活を送った。様々な土地から集まった同級生と、学生会館で一緒に食事をとり、とりとめのない会話を夜遅くまでする、まるで自宅にいるような打ち解けた寮生活で、新入生の女子学生とデート、わずかばかりの賭け事など、デューク大学の新入生らしい行動であった[2]。同時に、16 歳から 19 歳の青年にとって新鮮で楽しい、友情と寛容と仲間意識を育んだ時期であったと振り返る[3]。

しかし、クリスマス休暇から戻った際、「フラタニ

1）武蔵野短期大学幼児教育学科

ティー[4]」への勧誘と入会への選別調査によって、それまでの牧歌的な学生生活への終止符が打たれた。ここでブルーナーは、ユダヤ人がフラタニティーへの入会が認められないという事実を知り、ユダヤ人に対する差別意識に疎外感や憤りを感じたのであった。それでも、彼にとって大学生活は、父親へのせつなさ、母親との離別といった家族への終止符を意味するもので、家族から独立し、大学という新しい家族を発見する転機となった[5]。彼自身は、活気ある学生の雰囲気を超越した頭の良い集団にいて、フラタニティーのような、いわゆる大学生らしい子どもっぽい集団とは対照的に位置していた。

また、このときは初めて教えるという経験をした。寮の同室であったリー・アーノルドは、学生フットボールの有名選手で、運動奨学金によって入学し、後にニューヨーク大学の航空工学の教授となった。

デューク大学では、体育学科の学生で、一般教養課程につまづいている運動選手への配慮として個人指導を行った。そこでブルーナーはリー・アーノルドの家庭教師として雇われ、教えるという経験をした。ブルーナー自身、数学への造詣もあったため、リー・アーノルドとの関係は、教育者と被教育者という関係ではなく、リー・アーノルドから数学の魅力を学ぶなど、教授コンビであったと述べている。リー・アーノルドからリーマン、ロバチェフスキーなど新しい幾何学について聞き、数学の基礎は自然界に由来するのではなく、精神の本性に由来するという見方を学んだのであった[6]。

### (2) 心理学への興味

さて、デューク大学という新たな居場所を見つけたブルーナーは、生涯を通した研究領域である心理学と出会う。彼は、一時、将来弁護士にさせたいという父親の希望と、尊敬していた弁護士の面影によって、法学を学ぶことを視野にいれていたが、可能性を探るという思いから心理学を専攻した[7]。

心理学への入門は、デューク大学の教授、ウィリアム・マクドゥーガル[8]であった。ブルーナーによると、マクドゥーガルは「世慣れていて、講義のスタイルはかなりとつとつとしていたが、機知にあふれ、冬から夏を思わせるような春の季節になっても分厚いツイードの服を着て大学構内の小道を歩く様子は、全くスキのない、しかも風変わりなものであった[9]」とした。またマクドゥーガルの心理学概論の講義について、「あまりにもみごとに論じられ、疑問の余地を残さず、私の心を『とらえる』ものではなかった[10]」と述べた。

ブルーナーを引きつけた心理学は、マクドゥーガルではなく、ドナルド・キース・アダムズの比較心理学、カール・ゼナーの神経心理学で、「心の進化」というテーマであった[11]。そして、後の「知覚の仮説理論」の手がかりとなる心理学の論争と出会った。それは、猫の問題箱の実験におけるソーンダイク＝アダムズ論争であった。

ソーンダイクは、猫の問題箱の実験のなかで、猫の行動を外部からの賞と罰によって形成される試行錯誤と解釈し、アダムズは、猫の順応的行動は、その環境のなかで利用しうる手がかりに応じて生み出した仮設から、生じてくると解釈した。この問題箱の猫の実験に対する論争に対してブルーナーは、以下のように述べた。

> もしも環境に、適当な結び付けられる手がかりがあれば、動物は「洞察に富んだ」仮説によって反応することだろう。しかし、そこにいる動物がバカに見えるような、そういう見通しのきかない環境を設計することもできるわけだ。ソーンダイクのネコの世界とアダムズのそれとのちがいは、前者では何もないがらんとした檻のような箱があって、その天井の中央から一本だけひもがぶら下がっている（もしそれを引けば、奇跡でも起こったように扉が開くか、食物の小片が入ってくる）。ところが、アダムズのネコの世界では、ひもがその檻のような箱の天井を横切って、扉を閉めている掛け金につながっているのが目に見えるのである。ソーンダイクの動物は、何であれとにかく何かが見つかることを願いつつ、垂れ下がったひもの端へ向かって、その世界を試していたわけだ。アダムズの動物は、つながりが目に見える環境をじっと見ていた。ソーンダイクのネコは、行き当たりばったりな試行錯誤によって探し求めて動く以外、いったい何ができたか？[12]

ブルーナーは、猫の実験箱論争のなかにある、パラダイム、メタファーに興味を示すと共に、後の著作における「仮説理論[13]」の土台となり、同時に教育の理論へと導くこととなった。

### (3) デューク大学での研究

ブルーナーは一年早く卒業要件を満たし、同大学大学院へと進学した。デューク大学の大学院は、ジェームズ・デュークによる4千万ドルもの寄付によって、心理学研究科には活気があり、オルダス・ハックスレー、マーガレット・ミード、エドナ・ミレーなど英知が集結していた。そこではシグムント・フロイト、マリノウスキー、バーナード・ベレンソン、オルダス・

ハックスレーなどについて語り合われていた[14]。こうした偉大な師に指導を受け、共に研究できる環境は、ブルーナーを科学の道に進むことをいっそう加速させることとなった。

また1930年代は、ニューディール政策、満州事変、ムッソリーニによるエチオピア進攻、ヒトラーの台頭などの社会情勢もあり、知的な議論だけでなく政治的な議論も行われていた。したがって、純粋に心理学研究と向き合う期間であると同時に、国際情勢や政治などへの傾倒も始まったのであった。この時、ブルーナーは世界の独裁者の台頭により、侵略、強制に対するアンチテーゼを強く抱くこととなった[15]。

1937年（21歳）、ブルーナーは、デューク大学で文学士を取得した。彼は、初の研究として、メスのネズミの性行動に関するホルモンのコントロールについての研究論文を執筆した。ここで、アイデアを検証する技術を身に付ける楽しさ、同じ研究者たちと夜通し過ごすことの喜びを知った[16]。

次の研究では、行動主義心理学者トム・マカロックと共に、賞罰に関する研究を行った。ブルーナーの目的は、賞罰は経験と同様に、それに先立つ行動を促進させたり、抑止させたりする自動的作用ではないことを証明することであった。さらに、賞罰に対する動物の態度を変えることによって、行動に対する賞罰のもつ影響を変えることができることを証明することであった。こうしたネズミを使った実験は、後の実験のなかでも最も洗練されたものの一つと彼は述べている[17]。実験結果に対して何の反響もなかったが、行動主義心理学の強化（賞罰による条件反応の形成過程で、行動の説明原理）を覆すこととなった。

しかし、ブルーナーは、ネズミを使って実験することの意味について批判的に捉えている。ネズミは学習や動機づけの問題解決への正統な手段ではあったが、心理学を語るうえで、ネズミの術語に変換しなければならない状況、神経系の進化に対する崇拝と、ネズミによってさえ説明できるということは、信仰であったと述べている[18]。つまり、認知心理学の余地はなく、彼が後年研究主題とした、文化と言語への議論など全くなかったのである。

1938年（22歳）、デューク大学の最後の年、ブルーナーは、マルキシストの研究会からの勧誘を受けた。研究会での活動は、毎週、マルクスまたはレーニンの書物を読み参加するのであるが、ここで彼はマルキシストの「生産とは、各人にとってのその努力に応じた、使用のためのものであって、利潤のためではない」というスローガンに共感した[19]。

結果、彼はダラムの共産党支部への参加することとなった。しかし、あくまで共産主義の「弱者のために圧制者と闘う」という外部的な信念に惹きつけられたのであり、内部的な共謀への魅力ではなかった。彼自身、外部的な興味しか抱いていないこと、党員からの信頼も薄かったこと、ダラムを離れることもあり、わずか一年間で離党した。

ブルーナーは、デューク大学を離れるに当たって、二つの選択肢を前にする。1つはイェール大学でロバート・ヤーキスに支持し、動物行動の研究を行うこと、もう1つは、ハーヴァード大学に進学することであった。イェール大学、ハーヴァード大学、共に合格を貰っていたため、彼は決断を余儀なくされた。

最終的にはブルーナーはハーヴァード大学への進学を決断する。その要因として、クルト・コフカの『ゲシュタルト心理学の原理』とゴードン・オルポートの『パーソナリティー』を読み、動物研究への信念を揺るがせたこと、イェール大学のイメージは青春、「Y」のイニシャルの入ったセーターを着た活気に満ちた若者たち、ハーヴァード大学のイメージはウィリアム・ジェームズ、ヘンリー・ジェームズであり、ジョージ・サンタヤナの知的な清らかさ、このイメージを基に選択したこと、イェール大学で師事する予定であったヤーキスに知的に共鳴することがなかったことなどを挙げた[20]。

また進学に際して、マクドゥーガルに相談したことも明かしている。「彼は親切にも、彼の家の庭でお茶を招いてくれ、そこで、ハーヴァードは癒しがたいほど反メンタリズムと還元主義に毒されていると、私に警告した。それ以上に悪いところといえば、オックスフォードぐらいのものだ、と言う[21]」。それでもブルーナーは、疑問の余地なくハーヴァード大学に新世界が生まれことを信じて選択した。

デューク大学でのブルーナーは、まさに青春を謳歌し、研究者としての片鱗を見せた時期であった。マクドゥーガルは、ブルーナーの実験心理学の礎となったがイェール大学か、ハーヴァード大学の選択においては、その反対を押し切ってまでハーヴァード大学を選択した。ブルーナーの研究の特色として、「先駆者[22]」を超えることが挙げられるがこの超えるという特徴は、デューク大学時代から始まっていたと推測される。つまり、マクドゥーガルの示す方向ではないということが、その一つと読み取ることができるのである。

オルポートの『パーソナリティー』によって、これまでの動物を用いた実験心理学からの転換のきっかけとなったが、ソーンダイクという偉人の学び家という点も忘れてはならないだろう。

## ２．ハーヴァード大学院時代

1938 年の初秋、ブルーナーはハーヴァード大学の大学院に入学した。彼は、ハーヴァード大学のキャンパスを古代ギリシャのアテネと例え、知的風土の良さに感銘を受けた。またソーンダイクが、かつて使用していた研究室が、彼の新たな研究室となり、エマーソン・ホールを我が家として愛着した[23]。

ここでは、ヘンリー・マレー、K・S・ラシュレーを筆頭に、ゴードン・オルポート、エドウィン・ボーリング、ジャック・ビービ＝センター、ロバート・ホワイトなどを大家とし、若い教員たちは下級将校、ブルーナー達若手研究者を下士官という師弟関係で、研究活動は行われていた。ブルーナーは、ラシュレーであろうと、オルポートであろうと、誰であっても共同研究できるという優れた環境であり、何よりも、実質的にも、形式的にも分け隔てなく受け止めてくれたことに感銘を受けていた[24]。

そして、ブルーナーの大学院 1 年目は、師の模倣しつつ、論文を書き上げ、そのことに陶酔していた。つまり、自分たちが選ばれた心理学のエリート学者であると考えていた。下士官クラブ、つまり院生同士のゼミナールでの主なテーマは、実験心理学で知覚、記憶、学習、動機づけ、神経心理学、動物行動などであった。

ブルーナーもそのことを研究テーマとし、寄せ集めの私的ゼミナールを、それまでの人生で最高の知的経験の 1 つとして挙げた。またブルーナーは下士官の中でも優秀で、師であるオルポートからも高い評価を得ていた[25]。

彼が大家と示した学者の中でも、とりわけ、オルポートとマレーについて、詳細に以下のように記している。

> 教授たちの中でその二人、つまりオルポートとマレーは―ちょうどモーツァルトとワーグナーのように―理論的にも個人的な流儀でもちがっていたが、ハーヴァードの心理学の場では必然的に同志だった。もともと医者としての訓練を受けていたマレーは直観的で、熱中するという点ではまるで少年のようで（人間の状態についてはかなり悲観的だったが、）世俗的で機知に富む、ボストンの名門出身者だった。彼はアカデミックな心理学についてほとんど知らず、自分の考えを現代の学習や動機づけの理論という誰もがなじみやすい型に移し変えようなどとは、全く考えてもいなかった。オルポートは自制的で、流儀や仕事の習慣の点では気むずかしく、人間性や人間の状態を改善することについては楽観的であった。彼はオハイオ州出身であり、自然科学に対する精神科学を支持していたせいで、マレーと同様、還元主義に安んずることはできなかった。超一流の教師であったオルポートは、常に「準備ができて」いて、講義はみごとに体系化され、むだ口がいっさいなかった。彼は内気な人で、多くの学生は彼のことを堅苦しくてちょっと冷淡な人だと「考えており」、直観的直情型で物事に対して夢中でアプローチするマレーとははっきりちがっていた。彼らは、その鼻っ柱の強い環境の中で、尊敬に値する同志の奇妙な二人組だった。
>
> オルポートは博学な人だった。彼の広範な学識、現代の心理学理論となんとかつなぎ合わせてようとする彼の試み、それは私が好きだった。私は彼の「学生」の一人になり、専門の話をしたり共同で研究をしたりして多くの時間を一緒に過ごしたけれども、しかし、私の思考様式に深い影響は与えなかった。その点では、ハリー・マレーも同様だった。パーソナリティーそれ自体の研究は、私に合っていなかった[26]。

オルポート、マレーからの影響を受けつつも、ブルーナーが父親のように慕い、自身が独立する際に最も辛い別れとまで語る、ボーリングについて以下のように示している。

> …エドウィン・ギャリゲス・ボーリングは、背の低いがっしりとした体格の人で、心理学については徹底的にまじめだったが、そのまじめさをキラキラした目と身体を震わせる大笑いとで和らげていた。彼は、歴史的良心であり、心理学史に関する一流の著作の著者であった。…チェサピーク湾東部沿岸地方出身のクエーカー教徒である彼は、ハーヴァードの乙にすました態度に毒されていない、「飾り気のない流儀」と無垢な関心を保ちつづけた。彼自身、週に八十時間仕事した。彼の反応には、びっくりするような率直さがあった。知的な問題をずさんに評価したり、義務を怠ったりすると、彼のわかりにくい書体でこまごまと誤りを訂正してある、行間をびっしり詰めてタイプされた手紙を受けとることになる。…心理学では彼は、厳密に実験的なもの、明晰なもの、精神物理学的なものを支持していた。…私は、彼の論法の簡潔さがたいへん好きだった。彼は私にとって、一種の、たった一人の準拠集団になった。私が何をしているかではなく、それをどのようにしているか、この点をいつも彼は評価し感心してくれるので、私はそのことを深く気にかけていた。われわれ二人は、多くの本質的な問題で意見が合わ

なかったが、しかしコミュニケーションを断とうとしたことは一度もなかった。カール・ポッパーよりもずいぶん前から、ボーリングは、科学とは誤りがあったときにそれをより簡単に見つけ出すための一連の方法なのだ、という考えの唱道者だった[27]

ハーヴァード大学院時代のブルーナーは、実験心理を基礎に心理学の巨人から指導されていた。それは彼にとって最も知的探究心の溢れた時期であり、充実した日々であった。

しかしながら、認知心理学からのアプローチに可能性を見出していたこと、また批判的思考を主体とする研究への姿勢からか、オルポート、マレー、ボーリングと心理学的、本質的な同一性を見出すには至っていない。

またブルーナーからみた、オルポート、マレー、ボーリングという観点でも興味深い。特に父として慕うボーリングに対する尊敬は強く、「何をしているかではなく、どのようにしているか」を評価する在り方は、意味を問う質的心理学の芽生えとしても読みとれ、むしろその延長としてさえ認識することもできるのである。

## ３．戦争とブルーナー

ブルーナーがハーヴァード大学に在籍していた時期は、世界大戦への始まりの時期でもあった。ブルーナーのヒトラーへの反発、独裁への怒り、共産主義的な弱者救済といった理念は、「交戦国の宣伝放送の特徴」という学位論文の形で、戦争への参加となった。学位研究の仕方は、放送を精査して分析するという仕方で、言葉の中の形容詞の使い方から、戦況を読み取るという方法であった。1940 年（24 歳）には、ドイツ、イタリア、日本の短波放送を監視するため、プリンストンで過ごすこととなった[28]。

そして、学位論文を書き上げ、一週間も断たないうちに外国放送監視施設に勤務するためワシントンへと移住した。それは、1939 年の初めてのヨーロッパ旅行において、イタリアのミラノにあるファシストのホテル、ムッソリーニハウスに宿泊したときの経験やヒトラーのポーランド、フランス侵略、ロンドン大空襲などに触発されてのことだった[29]。そしてブルーナーにとって英雄は、フランクリン・デラノ・ルーズヴェルトとなった。

同時期にブルーナーは、キャサリン・フロストと結婚した。キャサリン・フロストは熟練した編集者で、ブルーナーと同様に戦争に関わる仕事をしており、ワシントンへと共に渡った。当時を彼は幸せな家庭の時期として振り返っていた[30]。

ワシントンでは、引き続き、交戦国の放送を傍受し、その結果を国務省、陸軍省に報告する任務にあたっていた。同僚である周りの学者、ジャーナリスト、フリーライター、亡命者たちは、現実主義で情報を求めていたのに対し、ブルーナーは、敵の心の中の自信喪失、過度の楽観主義、悪意などの徴候を読み解くことを目的としていた。ワシントンでの仕事を「楽しい」としつつ、真珠湾攻撃を読み取れなかったことに対する自信喪失と心理学者として有用な仕事であるのかという疑問を抱いていた[31]。

1942 年（26 歳）、レンシス・リッカートの登場により彼は、転機を迎える。戦争との関わりから、人々の士気をどのように維持するか、戦争の宣伝に世論はいかに反応しているかという部門が設置され、ブルーナーは進んで転属した。新しい課での任務は農業経済部計画調査課で、財務省には戦時公債について、戦時生産局には労働者の士気について、ホワイトハウスには女性の労働力編入について、それぞれ調べ、自身の部局では市民は戦争問題についてどれほど知らされていて、またその情報をどこで入手しているかについて検討した[32]。

なかでも、ブルーナーは、印象深い調査として、「アメリカの参戦が必要であるか」、「ヨーロッパでどの国が戦勝国となるか」など戦争に関する様々な質問を『シカゴ・トリビューン』の読者と他紙の読者がどのように答えるかについての比較調査を挙げた。彼は『シカゴ・トリビューン』の読者の閉鎖的で孤立した意見に驚愕すると共に、アメリカのすべてが外国人を憎んでいないということに努めた。

ブルーナーの所属していた情報局は、リッカートへの支持が失われたことによって、突然部門の廃止となった。そしてブルーナーは、ハドリー・キャントリルの誘いで、自身の世論調査研究所の副所長の職に就くべく、妻と 1 歳の息子、ホイットリーを連れ、ワシントンを去りプリンストンへと移住した。そこでは、外交政策に対する一般の理解と支持について、国務省と協力し取り組むこととなった。

プリンストンでの生活は、週に一度、ワシントンに報告のために主張し、木曜日の夜は、トールマン家に泊まることとなっていた。トールマン家に集まる人々、ワシントン時代の同僚ルース・トールマン、心理学者エドワード・トールマンの兄である、リチャード・トールマンがいた。またロバート・オッペンハイマーも宿泊仲間として挙げられている[33]。オッペンハイマーについては次のように示している。

彼は才気があって何にでも関心をもち、やたら頑固でどこのどんな話題でもすぐにとびつき、おそろしく愛嬌があった。私は彼がその当時何をしているのかさっぱりわからなかったが、ただそれが戦争の仕事で、南西部で行われていることだけはわかった。われわれはほとんどありとあらゆることについて話し合ったが、しかし心理学と、物理学の原理とについては、特に触れずにいることができなかった。われわれは親しい友だちになった[34]。

オッペンハイマーの他にも、トールマン家にはミスター・ベイカーと称した、ニールス・ボーアとの交流も披歴している。

ブルーナーは、ハーヴァードの大学院以降、自ら戦争との関わりを求めていった。心理学をいかした交戦国の情報を収集し、読み解くという業務が適材適所と言えるだろう。

## おわりに

本論文では、ブルーナーのデューク大学時代、ハーヴァードへの進学、戦争との関わりを中心に明らかにした。第二次世界大戦という激動の時代においては、ブルーナーのアカデミックな側面と政治的側面という両側面から捉えることができる。

アカデミックな側面では、オルダス・ハックスレー、マーガレット・ミード、マクドゥーガル、ヘンリー・マレー、K・S・ラシュレー、ゴードン・オルポート、エドウィン・ボーリングなど現代においても名だたる心理学者との交流、共同研究を通して、ブルーナーの心理学が洗練されていった。また心理学者に留まらず、ロバート・オッペンハイマー、ニールス・ボーアといった物理学の巨人との交流も、ブルーナーの学問に対する懐の深さと同時に、「雑多」と称される所以も知ることが出来る。

政治的側面では、デューク大学時代の共産党員としての活動、共産主義にみる正義への傾倒を皮切りに、本格的に政治、戦争へと踏み込む時期であった。ブルーナーの政治思想は終始一貫しており、外部的、つまり内部的な人間関係、策略、謀略といったものではなく、弱者のための正義、圧政、独裁、特にヒトラーへのアンチテーゼであった。これらの事からも、70 年代以降の「貧困と教育」というテーマも、政治思想の反映として読み取ることができる。

このように過去を過去として綴るのでなく、現代のブルーナーに対する影響としても、デューク大学、ハーヴァードの大学院時代は重要な時期として位置づけられるだろう。またブルーナーの視点を通して、歴史を振り返るというのも、自伝の一つの醍醐味といえるだろう。戦争との関わりにおいても、情報部というのも心理学者として納得のいくところである。ヒトラー、ムッソリーニと並んで、日本の満州事変や真珠湾攻撃への関わりという点でも、彼の心理学研究では知り得ない事実を知ることが出来た。政治的関心はウッズホール会議やヘッドスタート計画への参画においても垣間見ることが出来るが、大学時代から既にその片鱗があり、心理学研究と政治的興味はブルーナーにとって両輪であるといえるだろう。

今後の課題として、戦争参加の変容などについて解明していきたい。

## 脚注

1 今井康晴（2013）「ブルーナーの教育論に関する一考察 (3)―教育論の形成過程を中心に―」『広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座学習開発学研究 5 号』 25-30 頁

2 Bruner, J. (1983), In Search of Mind : essays in autobiography, New York: Harper & Row p.21.　ジェローム・ブルーナー著 ; 田中一彦訳（1993）『心を探して : ブルーナー自伝』 みすず書房　35-36 頁

3 Ibid. p.23 同上 37 頁

4 男子寮、女子寮あるいは学生のための社交団体で、相互の友情、福利の増進、友愛を目的とする全国的組織。秘密厳守、儀式、しきたりがある。

5 Ibid. Bruner(1983) pp.23-24 前掲『心を探して : ブルーナー自伝』 38 頁

6 Ibid. pp.25-26 同上 42 頁

7 Ibid. pp.24-25 同上 38 頁

8 ウィリアム・マクドゥーガル（1871-1938）は、心理学において本能説を説き、社会心理学に影響を与えた。行動の原因は学習よりも、本能が先行するとし、本能を構成する遺伝的、生得的要素を強調した。

9 Ibid. p.24 同上 38-39 頁

10 Ibid. p.24 同上 39 頁

11 Ibid. pp.24 同上 39 頁

12 Ibid. pp.24-25 同上 39-40 頁

13 様々な知覚は、利用できる手がかりをまとめあげるプログラムから生み出された仮設によって決定される。対象に対しての仮説をもつことで経験への準備が行われ、実際の経験によって仮説が検証され、誤っていたり、不一致の場合その仮説が修正される。仮説が強いほど、確認に必要な情報量は少なくなり、その仮説の発生率が高くなる。

14 Ibid. Bruner(1983) p.26 前掲『心を探して：ブルーナー自伝』43 頁
15 政治的権力や自由への強制に対して、ブルーナーは 2 つの事件を起こす。1 つは、週に一度の礼拝を大学が強制したことを拒否し、学部長に講義の手紙を書いたことで、停学処分となった。もう一つは、学内のカンニングに対して、自警団を結成し糾弾するということに対する批判を大学新聞に書いたこと。
16 Ibid. p.28 同上 45 頁
17 46 頁
18 Ibid. pp.28-29 同上 47 頁
19 Ibid. pp.29-30 同上 48 頁
20 50 頁
21 Ibid. pp.30-31 同上 50 頁
22 例えば、ピアジェ、デューイなど
23 Ibid. pp.32-33 同上 52 頁
25 Ibid. pp.36-37 同上 60 頁
26 Ibid. pp.35-36 同上 59 頁
27 Ibid. p.37 同上 60-62 頁
28 Ibid. pp.38-39 同上 63 頁
29 Ibid. p.39 同上 65 頁
30 Ibid. p.39-40 同上 66 頁
31 Ibid. p.41 同上 68 頁
32 Ibid. p.42 同上 69 頁
33 Ibid. pp.43-44 同上 71 頁
34 Ibid. p.44 同上 72 頁